

スタートカリキュラム参観者の声

4月13日（水）

先生方が「どうしたいの」とか「どうするの」とかたくさん子どもたちに問いかけていて、それを子どもたちが体全体を使って、頭をフル回転させて解決していったと思います。教室が安心できる場所であったりとか問題を解決していく場所であったりとか、入学4日でそんな教室づくりができていたのだと思いました。
文部科学省 教科調査官 斎藤 博伸先生より

4月13日（水）

子どもたちが朝の遊びの時間では、生き生きと、やりたいことを自分のペースでやっていると同時に、同じ部屋の空間にいる友達の姿をちょっと見ながら、遊びを介してつながりあっている姿を見せていただきました。先生たちが教える人ではなく、問いかける人、一緒に考える人ということが随所に感じられました。このような取組を小学校の最初の時にやっていただけると、子どもたちも自信をもって、主役として学校生活をスタートできると強く感じました。

4月21日（木）

安心感を思い思いに子どもたちがもつために、それぞれのやり方で今、一生懸命学校という場を自分の居場所にしようとしている姿、それを先生がそれぞれのやり方を大事にしながら目を配ってらっしゃるなどというのがすごく伝わってきました。こういう感じだと保育所の子どもたちが小学校に入学したときに、小学校という場所を居場所にしていけるんだなというのがよくわかりました。

4月21日（木）

二つのクラスの先生がそれぞれの先生らしさを発揮しながら、その瞬間瞬間で試行錯誤して、校長先生と相談されながら授業の展開を考えたり、子どもとお話されたりしているのを見て、これはすごく幼児教育とのつながりがある世界が今築かれているんだなというのを強く感じました。

4月22日（金）

こども読書の会の放送が始まりました。始まる前に、ほとんどの子どもたちは席について、始まるのを待っている雰囲気でした。放送が始まると、ほとんどの子どもの視線は画面に集中しており、「おはようございます」という挨拶に自然に「おはようございます」と挨拶をする声も上がります。さらにお話の最後に「よろしく願います」という言葉に、「願います」との声。画面越しでも、自然にやりとりをしていることに、コロナ禍を経験してきている「今」を感じました。

子どもたちが知っている先生が、語りかけてくださっているのも大きいかもしれません。というのも、次に、寶來先生が「おはようございます」と挨拶なされると、ひときわ大きな、今までで一番多くの子どもたちの「おはようございます」との応える声があがったのです。先生が『100万回生きたねこ』を紹介なさると「知ってる」「知ってる」と口々に声があがります。先生が、「好きなところを教えて欲しい」「感想が違うのが素敵」と語っていらっしゃるときにも、何人かが「はい」と言って、校長先生が大好きなこと、校長先生とお話したい！と思っていることが伝わってきました。最後、お話が終わると、「らっこ先生、ありがとう！」の声があがります。校長先生が本当に1年1組の子どもたちにとって身近なのだなあと感じました。

その後の本の紹介は、中学年、高学年の子どもたちへの紹介でもあり、ここまで、テレビ画面からの会話に伝えるという感じではありませんでした。でも、頷きながら、「はい」と言いながら聞いている子どもも少しいました。その状況を見ながら、寶來先生の語りかけは、子どもたちが応えていく「隙間」（豆先生の昨日の表現、素敵でしたね！）があることにも気がつきました。子どもたちと先生方の対話の秘密、さらに考えてみたくなっています。

玉川大学教授 岩田 恵子先生より